

「地図豆」の地図を広げて街歩き

95-1 北の鎌倉手賀沼へ (11.5km)



手賀沼の風景

かつて手賀沼畔には、武者小路実篤、柳宗悦、志賀直哉、嘉納治五郎（別荘）、バーナード・リーチ、村川堅固（別荘：西洋古代史）、瀧井孝作（仮寓地：作家）などが居を構えたこともあって、北の鎌倉などと呼ぶ人もいたのだとか。その手賀沼畔に並行してどこまでも続くハケ上のそれぞれの旧宅跡から下をのぞくと、そこには当時を偲ぶことができる素晴らしい風景が広がっている。

水辺の葦原では水鳥が飛び交い、丘の上に立てば手賀沼を眼下に広がり、晴天なら遠くに富士山を望むことができる、その道をひたすら歩く。

【道順】

JR 常磐線天王台駅（or 成田線東我孫子駅）→手賀沼畔（遊歩道）→水生植物園→水の館→鳥の博物館→手賀沼親水広場→手賀大橋→道の駅しょうなん・満天の湯→手賀大橋→旧村川別荘→ハケの泉 1→瀧井孝作假寓跡・古墳→志賀直哉邸跡→白樺文学館→楚人冠白馬城跡・杉村楚人冠記念館→嘉納治五郎別邸跡→手賀沼公園→水神社→ハケの泉 2→船戸の森・武者小路実篤邸跡→水神社→手賀沼ふれあいライン歩道→北柏ふるさと公園→JR 常磐線北柏駅



手賀沼畔

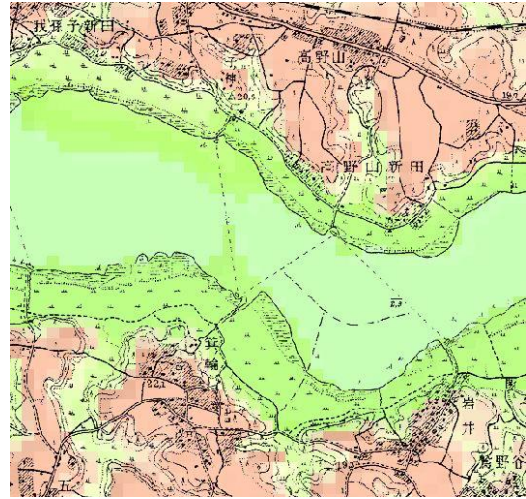
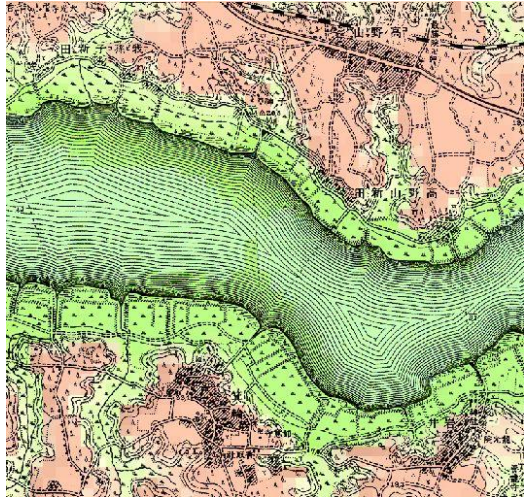


【街歩き解説】

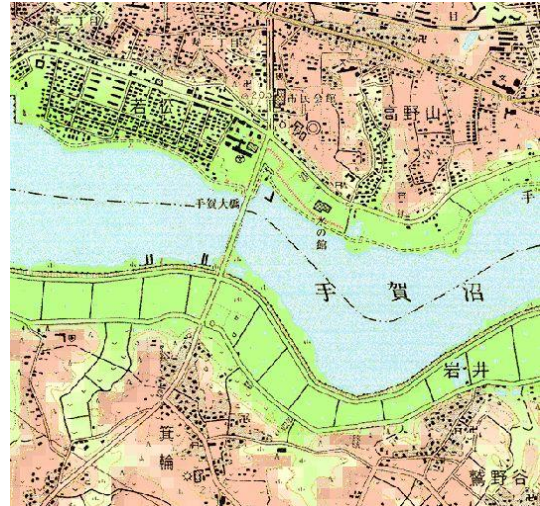
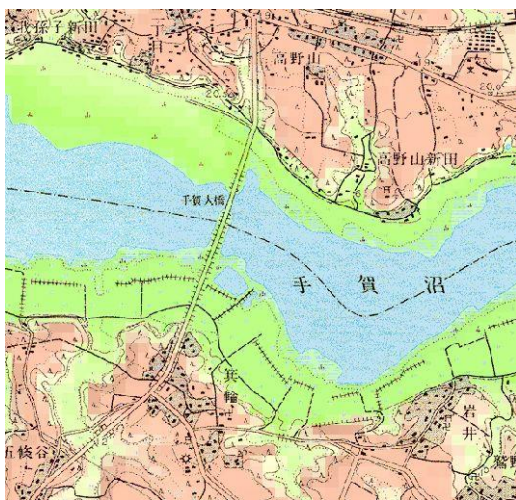
手賀沼：

手賀沼は、もともと「つ」の形をした大きな沼であったが、干拓事業によって約8割の水域が消滅し、北と南に分離された形になっている。干拓された地域には水田が開かれ、沼周辺には農地が広がっている。南北の二つの水域は手賀川を介してつながっている。一般に、北の水域を手賀沼（上沼）、南の水域を下手賀沼（下沼）という。

ここも見沼代干拓の井沢弥惣兵衛為永の建議で沼全体の干拓が計画され、江戸町人高田茂右衛門友清に工事を着手させた（1727 享保12年）。その後計画が変更され、沼を上・下に分け、中央に千間堤（浅間堤）を築き、下部のみを干拓した。これにより、約200町歩の新田が拓かれたが、上部沿岸の村々は排水不良となり、毎年のように洪水の被害を受けたという。その後、老中田沼意次や水野忠邦の時にも干拓の努力は続けられたが、洪水と老中失脚により成功しなかった。



- M36年（台地上には、未だ未耕地が多くあり、手賀沼に「渡し」（の記号）が見える）
 ・ S27年（谷を除き、台地の多くは耕地となる、未だ「渡し」がある）



- S43年（西北の台地上から宅地化が始まり、手賀大橋が開通した）
 ・ H8年（宅地化は台地上だけでなく低地にも進み、護岸整備も進化した）

旧村川別荘・瀧井孝作仮寓跡・志賀直哉邸跡・楚人冠白馬城跡・嘉納治五郎別邸跡・武者小路実篤邸跡、そして白樺文学館：

海軍水路局（現海上保安庁）初代局長柳樽悦が手賀沼を訪れたのは明治22年2月、それからおよそ20数年後、義弟旨悦の叔父にあたる嘉納治五郎が我孫子に別荘と農園を持った。さらにその4年後の大正3年秋、嘉納の別荘の向かいに柳宗悦夫妻が（三樹荘）住むことになった。

旧村川別荘は、親子二代の西洋史学者、村川堅固と堅太郎の別荘だった建物。我孫子宿日本陣の離れを移築した本館と、朝鮮風建築の新館がある。楚人冠と堅固は、嘉納治五郎らとともに手賀沼の干拓に反対し景観保護活動をした友人である。

杉村 楚人冠は、新聞記者、随筆家、俳人。関東大震災後、居を構えていた東京・大森を離れ、別荘として購入していた千葉県我孫子町（現我孫子市）に移り住み、屋敷を「白馬城」と称した。この地を舞台に、エッセイ集『湖畔吟』など多くの作品を著した。星新一や福原麟太郎など、楚人冠のエッセイに影響を受けた作家や知識人は少なくない。『アサヒグラフ』誌上で手賀沼を広く紹介するなど、別荘地としての我孫子の発展に貢献した。

白樺派の中心人物の一人であった柳宗悦は新妻の兼子とともに、大正3年の秋、手賀沼の叔父の嘉納治五郎の別荘地前にあった母親と姉の隠居所跡に移住した。

翌大正4年に柳の強い誘いで志賀直哉・康子夫妻、大正5年には志賀の生涯の友である武者小路実篤・房子夫妻など、相次いで白樺派の仲間が住むようになった。白樺派文人たちは、この手賀沼の美しい自然からエネルギーを享けて、我孫子の地で創作活動を大きく発展させた。このように、大正期の我孫子は白樺派の人々が集い、それぞれの未来に向けて羽ばたく画期を作った場所であった。

武者小路実篤は、手賀沼を見下ろす台地先端部に妻・房子とともに住宅を構えて、柳・志賀らと交流した。大正7（1918）年には、かねてからあたためていた構想である「新しき村」の発会式をここで行った武者小路は妻とともに宮崎県に旅立った。

白樺文学館では、こうした白樺派文人に係る所蔵品を展示している。

我孫子水生植物園：

6月上旬から中旬には、紫、黄、白と色とりどりの大輪の花菖蒲約15,000株、5月には約100mの藤の花が咲き乱れる。

水の館：

「水の館」には、高さ25mの展望室、展示ホール、研修室、プラネタリウム室などがあり、1階の展示ホールでは、手賀沼ゆかりの文学者や芸術家の紹介のほかに、手賀沼や水に関する知識を深め、水質浄化について考え、体験することが出来るように工夫されている。

展望室からは、四季折々の手賀沼の姿や遠く筑波山や富士山展望を楽しむことが出来る。

鳥の博物館：

人と鳥の共存をめざした、わが国初めての鳥だけを扱った博物館。手賀沼の自然と鳥たち、鳥の世界、人と鳥の共存などをテーマに展示している。

道の駅しょうなん：

手賀大橋のたもとにあって、もちろん手賀沼が一望できるレストランと農産物直売所が人気である。

コースマップ



**** オフィス 地図豆 Yamaoka mitsuharu ****